

東日本大震災特集

再生に向けて始動！ 釜石製鉄所



● トークスクエア

人間、働いてさえいれば、なんとかなります

漫画家 **西原 理恵子氏**

● GROUP CLIP

「新日鉄グループの復興技術・まちづくり支援」を
ウェブサイトに掲載



棒線事業部 室蘭製鉄所

製鋼工場 製鋼技術グループ マネジャー

青野 通匡^{みちまさ} (2004年入社、マテリアル応用工学専攻)

製鋼技術の視点から 新日鉄の国際競争力を高める

背景は室蘭製鉄所の転炉（修繕中）

新幹線の設計をしたい——高校時代そんな憧れを抱き、材料工学に興味を持った。大学で金属の腐食・防食メカニズムについて学ぶと、次第に鉄の世界に魅せられていった。そして大学院では、担当教授が当時参画していた鉄鋼協会傘下の研究会「革新的・混合分離リアクター創出研究会」で製鋼プロセスの流体シミュレーションに関する研究に取り組んだ。

「就職活動で鉄鋼大手各社を訪問しました。広畑製鉄所の冷鉄源溶解法を見て、高炉法と異なる新たな製鉄プロセスを世界で初めて実用化した、新日鉄の技術開発の底力を感じました」

入社後は自動車部品向け特殊鋼の主力製造基地である室蘭製鉄所の製鋼工場に配属された。特殊鋼は自動車部品の中でも特に強度や耐久性などが最も高い次元で求められるエンジン、駆動系、足回りのいわゆる重要保安部品に多く使われている。部品に求められるさまざまな要求特性に合わせた製品を開発し供給している室蘭で、強度と相反する良好な切削性を両立し、加工部品の長寿命化と製造時の環境負荷低減に貢献する「鉛を使わない低炭快削鋼」の実機化にも携わった。「鉛を使わない低炭快削鋼」の開発は、『第3回ものづくり日本大賞』優秀賞を受賞した。

「誰もつくったことのない鋼材をつくりたい。それが技術者としての夢です。しかし、いくら机上で上手な絵が描けても実現できなければ意味がありません。お客様に満足していただける高品質な製品を安定供給するためには、ラボでの研究開発の成果を洗練させる現場のデータが重要です。原理・原則と現場・現物の歯車がかみ合って初めて大きな力が生まれます」

昨年、全社精錬ワーキンググループのサブグループのリーダーを務め、現在は新日鉄のグローバル展開を支える海外製造拠点の技術支援にも携わっている。製鋼技術の視点から新日鉄の国際競争力を高める研究開発を続け、世界に通用する技術者を目指し歩んでいる。



自動車の重要保安部品に使われている室蘭の特殊鋼

研究開発の現場から

Series

再生に向けて始動！ 釜石製鉄所



釜石製鉄所

津波による被災地域

0 1 2 3 4 5km

出典：岩手県ホームページ

震災から約半年が経過した現在、被災した釜石ほか新日鉄グループの各拠点は、少しずつ、しかし着実に復興への道を歩み始めた。本特集では釜石地域を中心に、震災後、生活基盤の復旧・地域支援や、製鉄所・工場の設備復旧に取り組む新日鉄グループ社員の姿をレポートする。



第1章

地域と共に生きる製鉄所として

生活基盤の復旧・支援に取り組む



電力工場にも津波が押し寄せて冠水。

2011年3月11日14時46分、宮城県沖でマグニチュード9の巨大地震が発生し、東北沿岸地域に甚大な被害をもたらした。金石製鉄所・君津製鉄所のほか、グループ・関連協力会社が大きな被害を受け、特に金石製鉄所では地震と大津波により、港湾設備などが損壊し即時操業停止に追い込まれた。本特集の第1章では金石地域の被災状況と、製鉄所による初動対応や生活基盤・地域の復旧に向けた取り組みを振り返る。



製鉄所前の国道283号線に押し寄せた津波。被害を免れた本事務所前の敷地から所員がロープを投げて、車内に取り残された人の救助にあたった。写真提供：岩手日報社「平成の三陸大津波」

巨大津波が市街地を飲み込む。金石地域が未曾有の被害

地震発生後、金石市内は製鉄所を含めて全域で停電。その約30分後、信号が機能せず交通が麻痺する中で大津波が直撃し、市街地を飲み込んだ。金石製鉄所のグループ社員・家族の中からも多数の死亡者・行方不明者を出し、グループ社員の約2割が住居を失った。また、製鉄所では国内向け製品出荷を行う北棧橋、IPP（※1）用石炭・ビレット受け入れや製品輸出を行う南棧橋など港湾・物流設備が、大津波の直撃で壊滅的な被害を受け、線材工場や電力工場（※1）など構内の建屋も一部損傷・冠水した。

震災後1カ月間の出来事

3月

- 11日（金）地震発生
災害対策本部設置
- 14日46 本社へ第一報（内線電話）
- 14日50 出勤者の安全確認完了
所長が出張先より帰所、陣頭指揮
- 17日00頃 本社へ詳細報告（衛星電話）
- 21日00頃 行政や病院からの燃料供給要請に対応
帰宅困難者に備蓄食料を配給
- 12日（土）対策会議（安全確認最優先を指示）
安全確認名簿作成に着手・安全確認開始（グループ17社の社員・家族）、行政の土地提供要請に即時対応（自衛隊用ヘリポート、がれき置き場など）
- 13日（日）本社に支援物資要請
- 14日（月）行政に遺体安置所を提供
- 15日（火）震災対応組織を整備（紙で情報共有）、支援物資第二便（本社到着物資の配分ルール作成）
- 16日（水）本事務所に炊き出し用食糧確保、金石市へ支援物資搬入、仮設住宅用地提供、内線電話復旧、本事務所照明復旧（発電機）

（※1）金石製鉄所では、操業用電力のほぼ全量を東北電力から買電している。

一方電力工場では、IPP（Independent Power Producer：独立系発電事業者）として発電した電力の全量を東北電力に売電している。



各地から続々と届く支援物資は釜石本事務所の2階に集められ、物資班が配布した。



釜石製鉄所の女性所員が炊き出しを行い、社員に手作りのおにぎりが振舞われた。震災当初は飲料水にも不自由しながらも、鍋でご飯を炊いた。



本社やグループ各社、お客様などからの支援物資は、東京物流センターを中継基地として現地に運ばれた。



各製鉄所でも総力を挙げて物資調達・輸送を実施。設備の早期復旧に向け、各製鉄所の設備技術者がトラックに同乗した。



「災害対策本部」では、名簿から作成した搜索マップ（写真2段目）で順路を確認し、グループ社員・家族6,100名の安否確認を行った。



釜石市・大槌町など被災エリアごとに「足」で安否確認が行われた。

本人と家族の命が最優先。 社員と家族の安否確認に奔走

釜石製鉄所では地震発生約2分後に「災害対策本部」を立ち上げ、出張先から急きよ戻った谷田所長が陣頭指揮を執った。携帯電話などの通信手段は、東京の本社に第一報を入れた直後に寸断され、21時ごろになってようやく衛星電話1本が繋がった。震災当日に本社出張中で、現地との連絡役を担った釜石製鉄所総務部総務グループリーダーの奥野大輔は、次のように語る。

「製鉄所に配備していた1本の衛星電話だけが頼りでした。一日に3回、時間を決めて連絡を取り合うこととし、まずグループ社員・家族の安否確認を最優先で、現地と対応策を検討・実行しました」

翌早朝の対策会議では、社員とその家族の安否確認を最優先に取り組む方針が明示され、製鉄所グループ社員約1600名とその家族4500名、合計6100名の安否確認が進められた。災害対策本部の中に編成された安否確認班が地域ごとにチームを組み

（4名1組）、通信手段が何もない中、被災場所や避難所を巡り安否確認に奔走した。



釜石製鉄所 総務部
総務グループリーダー
奥野 大輔

被災した仲間思いを馳せ、 支援物資を現地に

一方本社では、地震発生の約30分後、進藤副社長を本部長とする「全社対策統括本部」が設置

17日(木) 出勤者への炊き出し開始(4月下旬まで継続)

18日(金) 受電再開、飲料水通水

19日(土) 所幹部による避難所激励訪問

20日(日) 行政と連携し、避難所へ物資支援

21日(月) 線材工場大浴場を被災者に開放

22日(火) 組織体制見直し(復旧対応を強化)、安否確認を各工場・グループごとに実施する体制に変更、自宅避難者への物資提供開始

31日(木) 所長メッセージ発信(安否確認・生活基盤再生と生産設備復旧の両輪で)

4月

4日(月) 外線電話復旧

5日(火) システム回線復旧(7日の余震で一時寸断)

11日(月) 社内メール復旧

12日(火) 全システム復旧

13日(水) 宗岡社長が激励訪問、線材工場稼働(圧延再開)



市民に開放された線材工場の大浴場と避難所を巡回する送迎バス。
7月9日まで延べ6,000人の市民が疲れを癒した。



製鉄所構内の空き地は市街地から集められた
がれき置き場として活用された。



避難所生活では多くの所員・OBが地域住民のまとめ役となった。所長がグループ社員を
慰問した際に、避難所生活者全員への激励挨拶を求められる一幕もあった。



避難所解散の日に、被災者でバーベキュー大会。



行方不明者の搜索、がれき撤去にあたる当社社員。市民
からは製鉄所員の青い作業服を見ると安心したという
声も聞かれた。



市に対して、被災者向けの仮設住宅用地を
提供（写真は松倉サッカー場）。



製鉄所構内の土地・建物を、津波被害を
受けた官公庁の仮事務所として提供。

地域を支える 製鉄マンとして

一人ひとりが自ら考え、 地域の支援活動に取り組む

被災後、製鉄所では釜石市からの要請を受け
て保有施設・用地を提供。構内用地や建屋をが
れき置き場・遺体安置所・津波被害を受けた行

被災地に一刻も早く
支援物資を届けよ
うと各所や協会の
社と一体となった対応
を行うことができました」と語る。



営業統括部
物流グループリーダー
壇上 治享

された。13日に釜石からの支援物資要請（食料・
日用品・燃料・発電機など）を受け、緊急支援
物資輸送に関する警察署への許可申請を行った
後、本社（東京物流センター経由）と各製鉄所か
ら支援物資トラックが順次出発。15日に第一便
が到着して以降、継続的に支援物資が輸送され
た。グループ各社やお客様からの支援物資を含
めて、4月上旬までに合計トラック約60台分の
物資が届けられた。現地では、災害対策本部の
物資班を中心に、輸送品目・納入日などの一元
管理、現場の実情に応じた支給対応が行われた。
本社で救援物資輸送に取り組んだ営業統括部
物流グループリーダーの壇上治享は、「トラック・
燃料の手配や、受け入れ先・発電
ルートの調整に苦労しましたが、



釜石シーウェイブスの部員が物資の
運搬や介護支援（停電時の階段移動）
など、独自の地域支援活動を行った。

製鉄所の稼働が復興への希望を与える

釜石市企業立地推進本部
副本部長

佐々 隆裕氏



震災で不通となった国道45号線に代わり、今年3月5日に開通した三陸縦貫自動車道が、命の道となり、震災直後には釜石市周辺地域を含め9000人を超える人々が、市の避難所に押し寄せました。新日鉄さんには、自らも甚大な被害に遭っているにも関わらず関係施設の開放や用地提供を快くお引き受けいただきました。加えて物資提供や製鉄所構内の風呂開放などのご支援をいただき、心から感謝を申し上げます。

震災で不通となった国道45号線に代わり、今年3月5日に開通した三陸縦貫自動車道が、命の道となり、震災直後には釜石市周辺地域を含め9000人を超える人々が、市の避難所に押し寄せました。新日鉄さんには、自らも甚大な被害に遭っているにも関わらず関係施設の開放や用地提供を快くお引き受けいただきました。加えて物資提供や製鉄所構内の風呂開放などのご支援をいただき、心から感謝を申し上げます。

生活基盤の復旧が進む中、市民の間では、被災した企業の生産再開や雇用が大きな関心事となっています。新日鉄さんと共に公共埠頭の活用を検討し、製鉄所や関連企業が4月から順次生産を再開することができたことは、釜石市民に大きな希望と勇気を与えました。これから製鉄所と共に、市民が希望を持てる地域の復興に取り組みんでいきたいと思っています。

所員一人ひとりの行動が地域での信頼の礎に

釜石製鉄所長
谷田 雅志



釜石製鉄所では安否の確認・地域の復旧を最優先に、震災直後から各人が自身の役割を認識し迅速に実行できる態勢づくりを行い、地域の支援に取り組んできました。これまでの活動を通じて、「所員一人ひとりが、長年地域でさまざまな役割を担い、それが当社に対する地域の信頼につながっていること」「自ら考え現場・現物で行動するなど、当社の社員行動指針に盛り込まれた内容が、復旧活動においても重要な指針となったこと」を

実感しています。

震災後の混乱の中で、たくさんの方から「製鉄所が再稼働して初めて復興がスタートする」という期待の声をいただきました。3月末に本格的な設備復旧を決定し、お客様・全社・グループ各社のご支援のもと、現在着実に復旧・復興を進めています。近代製鉄発祥の地で、今後も地域と共に生きる製鉄所として、所員一丸となってこの危機を乗り越えていきたいと思っています。

政機関仮事務所に、松倉グラウンドをへりポート、松倉サッカー場などを仮設住宅(400戸)の用地として開放・提供した。

また行政と連携して、製鉄所に届いた支援物資の避難所への提供、医療機関への燃料(重油、軽油)・物資提供を行うとともに、製鉄所ならではの支援として、線材工場の大浴場を被災者に開放。市内各避難所から、たくさんの方が巡回バスで線材工場を訪れ、疲れを癒した。

今回の震災では、多くの社員やOBが、各地域の避難所や自治会・消防団などの地域活動で重要な役割を果たした。津波直後、地域のリーダーとして徒歩や自転車で数時間かけて本事務所まで必要な用具類を取りに来た社員や、自主的に行方不明者の捜索・がれき撤去に協力した社員もいる。壊滅的被害を受けた大槌町で、自宅が全壊しながらも地域の町内会長として避難所支援に奮闘した電力工場マネジャーの佐々木慶一は、「地域支援と製鉄所復旧のどちらを優先すべきかという葛藤の中で、所長メッセージを抛り所に避難所支援に取り組みました。町内会長であり新日鉄社員である自分に対する地域の皆さんからの強い期待を感じました」と語る。

一方、釜石シーウェイブスは、市の物資集配場での運搬作業をはじめ、介護施設で車椅子で生活する高齢者への支援、フランス料理を被災者に振舞うイベント支援など、日ごろお世話

になっている地域の方へのボランティア活動を積極的に行った。

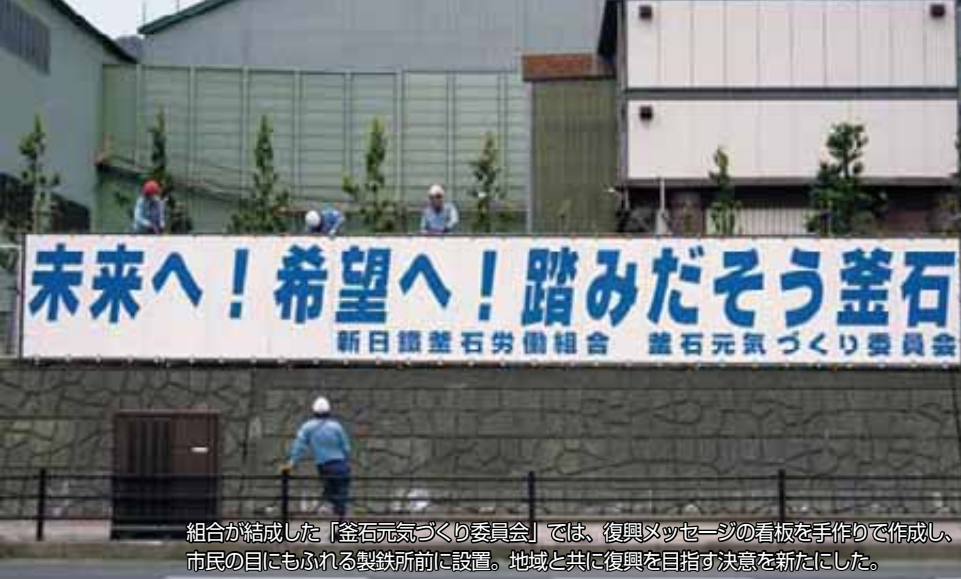


釜石製鉄所 製造部
電力工場 マネジャー
佐々木 慶一

被災した小学生を対象に、ラグビー教室や炊き出しなどを行った。右写真は、吉永小百合さんから寄贈されたTシャツを着て指導する釜石シーウェイブス部員。

9月11日、秩父宮ラグビー場で今季初戦が行われ、日野自動車に41-0で快勝した(左写真)。





組合が結成した「釜石元気づくり委員会」では、復興メッセージの看板を手作りで作成し、市民の目にもふれる製鉄所前に設置。地域と共に復興を目指す決意を新たにしました。



線材工場が生産再開した4月13日に宗岡社長が来所し全所員を激励。「新日鉄は釜石製鉄所と共にある」という言葉は、復興支援と生産再開に取り組む所員の気持ちを一つにした。



圧延を再開した線材工場

第2章

生産再開へ

釜石製鉄所、 復旧に向け力強く始動！ 地域に希望と勇気を

釜石製鉄所では震災から20日を経過した3月31日、谷田所長が所員・グループ社員に向けてメッセージを発信した。引き続き被災者の支援・地域の復旧に取り組むとともに、製鉄所の生産再開に向けた復旧作業を本格化することが述べられた。地域やお客様からの1日も早い製鉄所の操業再開を望む声に後押しされたものだ。第2章では、生産再開に動き出した製鉄所の取り組みを紹介する。

設備復旧に向けた所長メッセージを受け、製鉄所設備の復旧活動は、線材圧延・出荷の早期再開と電力需給のひっ迫する夏場前のIPP（電力工場）稼働再開を目指し、社内各部門の応援を得ながら進められた。

線材工場—— 釜石madeの高級線材を 再び世界に

線材工場では大地震の最中に停電が発生、線材圧延ラインは鋼材を噛み込んだ状態で停止した。早期立ち上げを念頭に、応急措置としてオイルセラー保護（非常用発電機稼働による地下水の浸水回避）を検討したが、所の港湾設備や地域インフラの被害状況が明らかになり、短期間での操業再開が困難なことが判明。オイルセラーへの地下水浸水やむなし（非常用発電機稼働による燃料消費を回避）との決断が下された。

この後3月18日の受電再開、31日の所長メッセージ発信を受けて、震災1ヵ月後の4月中旬の操業再開に向け検討を開始。地域や住民



釜石製鉄所 製造部
線材工場 係長
佐々木 順一



6月20日、試運転により受変電設備、各種エネルギー機器の健全性・安全性を確認。途中トラブルもあったが予定通り設備の立ち上げを実現した。



構内の石炭揚陸設備が損壊したため、5月7日から公共埠頭での石炭揚陸、トラック輸送を開始。IPP 運転再開に向けて石炭の備蓄を行った。

電力工場

地域への電力供給の責任を担いフル稼働へ

電力工場では、地震発生約20分後に隣接する川から水が溢れて敷地内が浸水。直ちに設備の安全停止に向けて、非常用発電機を起動。段階的に温度を下げるタービンの熱変形を防ぐ措置を24時間体制で行った(3月15日完了)。建屋・設備に大きな損傷はなかったが、燃料である石炭搬送用パイプコンベア全長1800メートルのうち800メートルが流失した。

大きな被害を受け混乱する中、操業マンの確保、浸水したオイルセラーの排水処理、資材品・重油の調達など、山積する課題を一つずつ解決していった。線材工場係長として再稼働に取り組んだ佐々木順一は当時を振り返る。
「オイルセラー内の油が混ざった水が川に流出することを防ぐため、バキュームカーを手配して排水処理に取り組みました。無事立ち上げができたことに安堵しています」

線材工場では4月13日、在庫ビレット(母材)を使用した圧延を再開。同月下旬には、公共埠頭を活用した、君津からのビレット受け入れ・線材製品の国内海送出荷が再開された。

製鉄所の電気設備全般を管理する電力工場マネジャーの三浦祥精は語る。

「震災5日目によりやく東北電力と連絡がつき、18日の受電に向けて、停電で真っ暗な中、設備全般の損傷状況の把握に奔走し、所内のライフライン復旧・操業準備が可能となる態勢づくりを行いました」

3月18日の受電復旧後、順次設備の健全性を確認。IPPの運転再開に向け、燃料である石炭を内航ガット船に積み替え、公共埠頭での石炭揚陸とトラック輸送の態勢を構築。5月7日に石炭受け入れを開始し、2カ月分の石炭を備蓄した。石炭灰の処理ルートも確保し、試運転を経て7月1日にIPPの運転を無事再開した。東北電力管内の電力需給ひっ迫状況を背景とした東北電力の要請により、運転再開後はこれまで経験のないフル操業を継続している(岩手県一般家庭電力



7月1日の運転再開と同時に煙突から水蒸気を排出したIPP設備。市民を勇気づける地域振興のシンボルにもなっている。



釜石製鉄所 製造部
電力工場 マネジャー
三浦 祥精

需要の約4割に相当。また、昨年10月に開始した木質チップと石炭によるバイオマス混焼も7月11日に再開した。

港湾設備

プロ集団の総合力で 着実な復旧を進める

地震・津波発生時、港湾設備では約40名のグループ社員が作業に従事していたが、迅速な判断と明確な指示で全員が無事避難した。しかし津波の被害で棧橋部の主要部分が損壊・陥没、全天候バーサや石炭輸送用パイプコンベア・アンローダとビレット水切り用岸壁クレーンおよび電源設備などの主要設備が損壊・浸水するなどの甚大な被害を受けた。設備復旧では優先順位を付け、方案の最適化を図りつつ、特に電力の安定供給につながるIPP向け石炭輸送用パイプコンベア・アンローダの早期復旧を目指した。現在、全社の各部門と迅速な情報共有を図り、同時に関係先に働きかけ早期の設備復旧に取り組んでいる。

設備グループリーダーの川畑輝夫は「技術開発本部EPCを中心に、釜石出身の応援者も含め、各所から数多くの技術者が結集し、当所設備部隊と共に設備復旧に取り組んでいます。適材適所の総合力と苦勞をいとわないプロ集団の底力を強く感じました」と熱く語る。

これらの取り組みと並行して、4月13日に線材工場操業開始後、岩手県と釜石市に要請して公共埠頭でのビレット荷役と、線材の国内・輸出海送出荷がスタートした。所の港湾設備も着々と復旧し、



4月中旬～5月中旬にスタートした公共埠頭でのビレットの荷揚げと線材出荷。

7月23日には南棧橋でのビレット分譲受けを再開、また石炭輸送用パイプコンベア・アンローダが復旧し、9月9日に石炭受け入れを開始した。

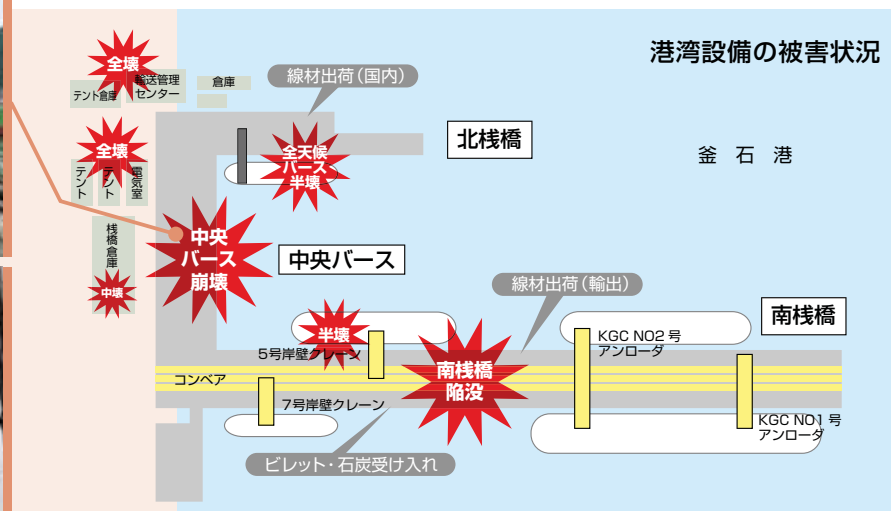
また、線材輸出を行う南棧橋は来年3月、線材国内出荷向け全天候バーサは来年4月の再稼働を目指して復旧工事が進められている。



釜石製鉄所 製造部
設備グループリーダー
川畑 輝夫



来年1月の完工を目指して復旧に取り組む中央バーサ。



製鉄所の動脈を担うパイプコンベアの復旧工事が急ピッチで進んだ(8月31日完工)。

復旧スケジュール概要

4月 線材工場庄延再開 13日(水)	4月 線材国内出荷再開(全天候バーサ復旧) 24日(日)	5月 線材輸出出荷再開(公共埠頭) 7日(土)	5月 IPP用石炭受入再開(公共埠頭) 12日(木)	7月 IPP運転再開 1日(金)	7月 ビレット分譲受入再開(南棧橋7号クレーン復旧) 23日(土)	8月 パイプコンベア復旧 31日(水)	9月 製鉄所でのIPP用石炭受入再開 9日(金)	2012年 1月予定 中央バーサ復旧 3月予定 線材輸出再開(南棧橋復旧) 4月予定 線材国内出荷再開(全天候バーサ復旧)
--------------------------	------------------------------------	-------------------------------	----------------------------------	------------------------	---	---------------------------	--------------------------------	---

情報共有と平時の備えの大切さを学ぶ

代表取締役副社長（地震対策統括本部長） 進藤 孝生

初めに、今回の震災で被害に遭われた皆様に、心からお見舞いを申し上げます。またお取引先の皆様をはじめ、当社グループの会社や関係者の多数の方々からお見舞い・ご支援を頂戴し、改めて厚く御礼申し上げます。一方、当社グループの社員やOBの方々が自身も被災する中、自らの判断でさまざまな地域支援に取り組んだことを誇りに思います。現在も困難な状況は続いています。現在も釜石地域の方々と共に乗り越えていく決意です。

さて今回の震災では、「情報インフラ」



と「平時からの備え」の大切さを痛感しました。震災当日の夜、当社では本社・釜石間で一本の衛星電話がつながっていません。この一本のおかげで、被災の状況や安否確認、初動対応、必要な支援物資の内容、その調達・運搬スケジュールなどを、本社・製鉄所間で共有できました。このおかげで辛く厳しい極限状態の中でも、関係者の方々が、ある種の「安心感」を持つことができたと思います。また、緊急時にはさまざまな制約がある中で、連続的に重要な決断を迫られます。避難訓練の徹底や非常用物資の備蓄はもちろん、普段から考え方を整理し、緊急時における対応策の優先順位、すなわち①まず社員・家族の生命を守り、②社外への被害拡大を防止し、③その上で地域への協力・貢献を行い、④最後に設備の復旧に取り組むこと、これを頭に入れておくことが重要です。

今後当社はこれらのソフト対策に、建屋の耐震対策などのハード対策を加えて、この両面から災害対策強化に努めていきます。

サプライチェーン——

お客様の支援を得ながら
釜石のバックアップ対応を行う

一方、震災・津波による釜石線材製品の生産・出荷停止を受け、棒線営業部を中心に、君津・室蘭両製鉄所とグループ会社による線材製品のバックアップ生産・出荷の検討が開始された。線材品種別に製品仕様や圧延能力などを月間単位で検証するとともに、お客様からいただいた注文明細ごとに、保管・梱包・出荷などの対応を含め、他所での振り替え生産の可否を一件ずつ確認していった。特に、自らも被災しながらスチールコードを中心に大量のバックアップ対応を行った君津製鉄所では、釜石勤務経験者も多く、釜石の注文を守る〴〵の思いで、震災直後から最優先で代替生産に対応してきた。全社の能力バランス検討を行った棒線営業部マネジャーの國安信昭は、その取り組みについて語る。

「通常月1回作成するバランスシートを、4月上旬までの間に約20回更新し、TV会議などで関係者に確認しました。各所やグループ会社の

努力は

もちろん、

注文

条件の変更

にも弾力的に対応い



棒線営業部 企画・調整
グループ マネジャー
國安 信昭

ただいたお客様のご理解があつてこそ
実現できたと思います」

こうした全社での取り組みが進む中で、釜石では4月13日に線材圧延が再開し、公共埠頭を活用したビレット分譲受け入れ、線材製品出荷が行われている。釜石の復旧にあわせながら、7月には君津・室蘭製鉄所やグループ会社からの生産の再移管は完了し、釜石の線材生産は、震災前の生産水準まで回復した。



君津線材工場では圧延工事を延期して釜石のバックアップ対応を行い、お客様へのデリバリーを守った。写真は、再開した君津から釜石向けのビレット出荷の様子。

人間、働いてさえいれば、
なんとかなります

西原理恵子氏

ゲスト●漫画家



© 西原理恵子

プロフィール●さいばら・りえこ

1964年(昭和39年)高知県生まれ。武蔵野美術大学卒。大学在学中に漫画家デビュー。以後、『ぼくんち』『まあじゃん ほうろうき』『パーマメント野ばら』など、独自の作風で熱狂的なファンを獲得。96年、戦場ジャーナリストの鴨志田穰氏と結婚。その後、夫のアルコール依存症、離婚を経て家族がまた一つになるまでの姿は『毎日かあさん』として映画化もされている(2011年2月)。8月27日に毎日新聞連載の『毎日かあさん』単行本第8巻(いがいが反抗期編)が発売。



旅先では、その土地で食べられているものを食べるのが流儀。

**お金があれば、家族を守れる。
人として生きることが出来る**

——漫画家として大きな成功をおさめています
が、生い立ちをつづった著書では、その原動力は
少女時代の貧しさへの反発だと書かれていますね。

私が過ごした高知の田舎町は、周りがみんな貧
乏で、あるのは典型的な閉塞感だけでした。女性
は16で結婚して、17で子どもを産んで、18で捨て
られて、それでまた19で新しい男と結婚してまた
捨てられる。その繰り返し。頑張ってる人もいた
けど、途中で頑張るのをやめちゃうんです。周り

に良いモデルになる大人がいなかったわけですから。
貧困が招く世代間の負の連鎖がずっと続いている
環境でした。

貧乏と暴力つてすごい仲良しで、それは弱い人
に最初に向かいます。母親はいつもお金がなくて
いらいらして子どもを怒鳴りちらす。父親は母親
を殴り、子どもたちは親に本気で殴られる。周り
は全部そうでした。それを見て、私も将来夫に殴
られて、子どもを怒鳴りつける女になるんだって
思うと、怖くて仕方がなかった。

——**子どものころの将来の夢は？**

絵で食べていきたいっていう漠然とした想いは
ありましたけど、女の子が女優さんになりたいい
て言うのと同じで、絶対になかないし、口に出
してもいけないんだらうなって思っていました。そ
もそも絵で褒められたこともなかったし、勉強も
ダメだったし、自分は一生夢のかなわない人間だ
と信じてましたから。周りの大人も誰も夢や希望
を語らないし。

大学受験の当日、ギャングブル中毒だった父が自
殺したんです。父は会社を経営してたんですが、
実際は借金まみれで、亡くなった後、家にはたく
さん借金取りが押しかけてきました。私はもう進
学なんてあきらめてたのに、母が借金返済のあと
に残った140万円のうち100万円を私に渡し
て、ここから出なさい、あんたは東京に行きなさい
と。それから、東京の美術予備校に通って美
大へ入学。絶対にあの貧しさに、あの場所には戻
らないぞと心に誓って、必死にやってきました。

——**西原さんは女性の仕事を持って働くことの大切
さを訴えていますね。**

母はお金のことと父と毎日夫婦げんかです。で
も、そうやって怒りながらも彼女はずっと働いて
きたんですね。そのお金で私たちはなんとかま
とに生きられた。もし、母が働いてなかったら本
当にひどいことになってたと思います。

貧乏を知らないって、いいことです。でも、
実は貧困つてすぐ隣にあるんです。だから女性は
働くべきです。専業主婦になって、夫を支えて、
子どもにいいごはんを食べさせるって、すご
く大事。でも、それだけではあまりに恐ろしい。
夫の会社はつぶれない、夫は自分を裏切らない、
夫は病気になる。彼女たちはそう信じてます
けど、間違いないんです。いざそうなったとき、家
はあつという間に壊れるし、貧困に陥ります。で
も、男性もそういう家庭的な女を求めますよね？
その考え方を変えていかないと。

女性が自立して経済力を持てば、夫を助けられ



るし、暴力をふるう夫から逃げられる。女の人なら、誰だって自分の子どもを泥棒や売春婦にしたいくない。子どもをちゃんとした「人」にするために、必死に働きますよ。アジアの貧しい国を旅すると、一生懸命働いているのはやっぱり女性。男の人は昼間っから飲んでくれていますから。ただ、女性がちゃんとした仕事に就けないから、稼げないんです。そもそも男の人にお金を預けて、この数千年貧困がなくなったためしがない。女性がちゃんと職業を持つ世の中に変えていけば、貧困はなくなると私は信じてます。

—— お金のことを日本人はあまりはつきり言いませんね。どこか「はしたない」という思いがある。

でもね、やっぱりお金がないといろんなものを守れない。私の夫（戦場ジャーナリスト・作家鴨志田穰さん）は、アルコール依存症になって入院して、結局、最後は癌になって死にましたが、つくづく思うのは、人を人として看取るにはものすごくお金がかかることです。

当時、彼は病気のせいで酒を飲んでほめちゃうか暴れてました。もし私にお金がなかったら、憎しみが残らなかったでしょうね。彼を人に戻すことができたのは、やっぱりお金があったからなんです。もし、お金がなかったら彼を見殺しにして、子どもたちにお前の父親は最低の人間だったと言いつけたと思います。それは憎しみの連鎖ですね。私は働くことができたから、そうせずに済んだ。働けば、人は人として生きることができる。だから働くって素晴らしいことですよ、やっぱり。



つらくても、愚痴らず笑う黒潮文化

—— 鴨志田さんとは一度離婚し、その後、西原さんの献身的な支えもあってアルコール依存症を克服し、また家族が一緒に暮らしています。鴨志田さんを、なぜもう一度受け入れられたんでしょうか。

これは西の情の文化に通じるかもしれませんが、「まあ、ええやん。帰ってくるならお帰りって言

うわ」っていうね、そんなニュアンス。どちらかというと、東は筋を通す文化だから、曲がったことは許せない感じでしょう？ でも縁あって子どももできたわけだし、「だから嫌い嫌い言うのはやめて、まあ、お帰りって言おか」って、そういう感じなんです。

それと西は、どれだけ面白いことができるかが上位にきますね。私は職業柄だんめつたに笑わ



ないんですけど、彼は突拍子もないことやって私を笑わせるのがうまかった。海外で夫婦げんかの後、素っ裸でヤシの木から「かあさん、ごめん」と叫びながら海にダイブしたり。まあ、これは見事に息子に受け継がれてますけど。

——毎日新聞連載の『毎日かあさん』を読むと、息子さんの突拍子のなさはよくわかります。

夫が死んだとき、お葬式に高須クリニックの高須克弥先生がきてくれて、息子を指さして私にこう言ったんです。「人はね、遺伝子の乗り物、舟なんです。ほら、あの新しい舟に乗り込んだ誇らしげな鴨志田さんをごらん下さい。もう古い舟のことは考えなくていいですよ」って。そのとき

は意味がよくわかりませんでしたけど、今見ると、ああ乗ってるなーって思いますね（笑）。そっくりなんですよ、やることです。

——西原さんの手にかかる、ありふれた日常が面白い漫画になる。ネタを見つけてくらませるのがすごくお上手です。

それは故郷の高知からもらったものかもしれません。高知人って、酒と料理と面白い話で人をもてなすんです。つらいことがあっても人前で愚痴はだめ。必ず何か面白くアレنجして言う。それが高知の大人の流儀。これって黒潮の民、鯨追いの文化なんです。人を楽しませるのが大好きで、東南アジアとか沖縄とかと、すごく似てると感じます。あとは「文句言い」ですね。東の人は弱いところはつつこまないでしょう？ 西って、つつこんでいじってナンボ。オチのない会話って、会話じゃないんです。だから自分はクリエイターじゃなくて、アレنجヤーだと思ってますね。

——長年多くの作品を描いてきて、スランプに陥ることはないんですか？

万年スランプですよ（笑）。私はマイナス思考で、ダメだダメだっていつも思ってる。でも、高須先生に言わせると、そうやって考えるからこそ私の作品はできるわけで、それはしょうがないって。たしかにね、漫画家って考えることをやめない商売だからしんどい。だから余計、旅行に行きたくなるんですよ。

旅行は私が子どもと行きたいだけで、子どもた

ちは家でごろごろしてたいから、かなり迷惑がってます。今年の夏は息子を海外にホームステイさせたんですけど、すごく嫌がってました。でも男はやっぱり外の釜のメシを食わないとねえ。

——漫画家として、これからの目標は？

ずっと描いていきたいですね。働き続けたい。一番怖いのは働けなくなること。だから優先するのは健康、仕事、家族。

こういう作品を描きたいっていうのはないです。皆さんにほんのちよつと喜んでもらえるものを目指したい。仕事で腹が立って眠れない人が、私の漫画を読んで気持ちが楽になって眠れましたなんて手紙をもらうと、ほんとううれしい。人の役に立ってやりたいですよ。お金はありがたいの証拠。コロツケ屋のおばちゃんみたいに、おいしかったよって50円もらう。そんな感じが理想ですね。

——最後に働く女性たちにメッセージをいただけますか。

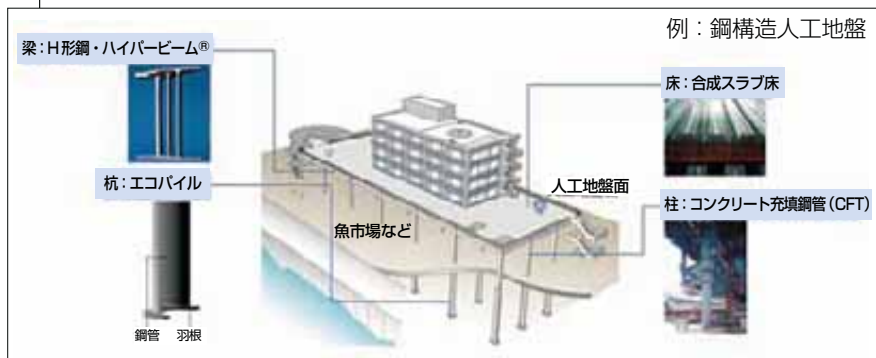
子育てしながら働く女性の先輩で、自分の時間がない、夫が協力的じゃないって愚痴を言う人がいるでしょう？ あれって仕事ができない女なんです。赤提灯で会社の文句言ってるおじさんと同じ。そんな人と一緒にいたらダメです。そこからどうするか、なんです。ただ文句言ってるだけの人なら会社もいらぬ。仕事も子育ても、大変ですけどすごく面白いし、忙しいうらい夢中になれば文句言ってる暇なんてない。とにかく、人間、働いてさえいれば、なんとかなるんです。

URL <http://www.nsc.co.jp/product/fukkou/>



主なポイント

- 港湾、河川、道路・鉄道、防災拠点、地盤対策、ライフライン、住宅、エネルギー、一般建築物、廃棄物処理の10項目に用途を分類し、用途ごとに検索、閲覧が可能。
- 復興時をイメージした「俯瞰図」「多重防御」「高台移転・職住分離」の3つの切り口から検索、閲覧が可能。
- 図・写真を多用し、技術、製品、ソリューションを視覚的にわかりやすく提示。



- 新日鉄グループを網羅(新日鉄、日鉄住金建材(株)、日鉄住金鋼板(株)、新日鉄エンジニアリング(株)、日鉄トピーブリッジ(株)など)。
- プロジェクト開発部、建材事業部、スラグ・セメント事業推進部、東北支店にまたがる「復興支援プロジェクトチーム」を窓口とし、電話やファックスのほか、メールでもご相談いただくことができる。

新日鉄復興支援プロジェクトチーム(東北支店建材グループリーダー) 赤尾 賢明

本サイトは各自治体が復興計画を策定する際に参考としていただくことを念頭に置き、同時に新日鉄グループとして復興需要を捕捉していくための起点とすることも指向し、問い合わせ対応やグループ各社サイトとの連携機能など新しい機能を盛り込んでいます。

お問い合わせ先 新日鉄復興支援プロジェクトチーム 03-6867-6357(土木関連)
03-6867-6385(建築関連)
03-6867-6199(スラグ)
022-227-2771(東北支店)

「新日鉄グループの復興技術・まちづくり支援」をウェブサイトに掲載

東日本大震災の被災地の復興・復興が進められる中、災害に強いまちづくり・インフラの実現に向けて、今後、具体的な施策が行われていくこととなる。こうした中で、被災地の皆様、設計会社、設計コンサルティング会社、建設会社をはじめとする建築・土木関係の皆様などに、当社グループが貢献できる技術、製品、ソリューションを、よりわかりやすくご理解いただけるよう、新日鉄ウェブサイトに「新日鉄グループの復興技術・まちづくり支援」をアップした。

経営

釜石製鉄所 石炭揚陸設備とパイプコンベアの稼働を再開

釜石製鉄所は9月9日、東日本大震災により損傷し復旧作業を行ってきた自社港湾・物流設備に関して、石炭揚陸設備と、卸電力発電設備まで石炭を輸送するパイプコンベアの稼働を再開した。

両設備の稼働再開に伴い、卸電力発電設備の安定操業体制が確立された。釜石製鉄所電力工場は、岩手県で最大の出力規模を有し、県内の一般世帯の電力需要の約4割をま

かなうことが可能であり、今後も電力需給のひっ迫が想定される状況下、引き続き電力工場の安定操業を通じ、電力の安定供給に努めていく。

総務部広報センター
▲03-68667-2135
21352146・2147



石炭揚陸の様子

経営

「アニアルレポート2011」を発行

新日鉄は年次報告書と会社概要を兼ねた「アニアルレポート2011」を発行した。2011年度版のタイトルは「Building a Bold Future」。現在、検討が進められている住

友金属工業(株)との経営統合(2012年10月1日予定)を踏まえ、国内外の事業基盤の強化を図るとともに、グローバル生産・供給ネットワークをさらに拡大・深化させ、世界の伸



びゆく鉄鋼需要を新日鉄グループの成長に取り込み、未来を切り拓いていくとの決意が込められている。

総務部広報センター
▲03-68667-2146

グループ

(株)エヌエスオカムラが 釜石製鉄所で事業継続

(株)岡村製作所と新日鉄は、両社の出資会社で東日本大震災により生産を停止していた(株)エヌエスオカムラについて、釜石製鉄所構内で事業を再開させる復興計画を決定した。2012年5月中の生産再開を目指す。岡村製作所と新日鉄は、エヌエスオカムラの生産活動と雇用の継続を通じ、被災地の復興に貢献していく。

総務部広報センター
▲03-68667-2135

技術

カルシア改質土で 津波泥土を建設資材に変える実証実験

新日鉄と新日鉄エンジニアリング(株)は9月12・22日の間、被災地の津波泥土を建設資材に変える実証実験を、仙台市宮城野区で行った。この試験は、津波泥土に製鉄工程で発生する副産物を原料とするカルシア系改質土を混合し、土質を改良して建設資材としての再利用を図るもので、混合方法としては大量の津波泥土を処理できる回転式破砕混合工法を採用している。

総務部広報センター
▲03-68667-2135



回転式破砕混合プラントと改質された良質な土

がれきを含んだ
泥土

技術

高強度ラインパイプ用鋼管の敷設溶接技術 米エクソンモービルからライセンス供与

新日鉄と米国エクソンモービル・コーポレーションは、同社が保有する高強度ラインパイプ用鋼管(米国石油協会規格X120)の敷設溶接技術について、世界で初めてライセンス供与契約を締結した。本契約により、新日鉄はX120ラインパイプ用鋼管の製造技術と共に、敷設時の中核技術である敷設溶接技術をあわせ持つ世界初の鋼管メーカーとなる。X120はX80規格と比べ1・5倍の強度を持ち、高圧・大径輸送による経済性に優れたパイプラインの敷設を可能とする。

総務部広報センター
▲03-68667-2146



X120 ラインパイプ用鋼管

紀尾井ホール

新日鉄文化財団 公演ご案内

リスト生誕 200 年 特別企画 リスト × リスト

第1回 11月6日(日)／15:00
ピアノ：ダーヴィド・パール
ヴァイオリン：松野弘明
第2回 11月16日(水)／19:00
ピアノ：パラージュ・フレイ

第1回「超絶技巧の饗宴と多彩なる編曲」

パガニーニ：
24のカプリース
より第9番、24番

リスト：
パガニーニ大練
習曲集より第5
番、6番、3番
「ラ・カンパネラ」

リスト編曲：
リゴレット・
パラフレーズ
(ヴェルディ)
イゾルデの愛の死
(ワーグナー)
ほか



ダーヴィド・パール



松野弘明

第2回「豊かな民族色と深遠なる精神性」

リスト：
2つのチャール
ダーシュ

ハンガリー狂詩
曲より第2番、
6番、15番

2つの伝説、
ピアノ・ソナタ
口短調 ほか



パラージュ・フレイ

19世紀中頃、ヨーロッパ社交界の貴婦人たちが虜にし、その変幻自在で華麗な技巧から「ピアノの魔術師」と呼ばれたリスト。奔放な女性遍歴の後、後半生は聖職の道へ進み、その音楽はやがて精神的・宗教的なものへと昇華する。リスト74年の生涯の多彩なピアノ作品をハンガリーの新星ダーヴィド・パールとパラージュ・フレイの演奏でお楽しみください。

スケジュール

11月15日(火)／19:00

新日鉄プレゼンツ

ニュー・アーティスト・シリーズ

第24回 田中拓也(サクソフォーン)

ブラームス：ソナタ第2番ホ長調 Op.120-2
ドビュッシー：シランクス、サクソフォーンの
ための狂詩曲 ほか

お問い合わせ・チケットのお申し込み先
紀尾井ホールチケットセンター (日・祝休)

TEL 03-3237-0061

<http://www.kioi-hall.or.jp>



新日鉄 内田常務取締役(左から4番目)とアルセロールミタル米国社
リッピー社長(右から3番目)

総務部広報センター
▲03-6867-2135

新日鉄とアルセロールミタルの米国合弁会社アイ・エヌ・コート社が操業20周年を迎え、8月19日に現地で記念式典を行った。アイ・エヌ・コート社は北米で自動車向けの高品位表面処理鋼板を製造することを目指して建設され、1991年に操業を開始した。

経営 米国アイ・エヌ・コート社 操業20周年記念式典を 開催

グループ

新日鉄マテリアルズ(株)が新型銅ボンディングワイヤのライセンスを供与

新日鉄マテリアルズ(株)と同社子会社で半導体実装材料メーカーの(株)日鉄マイクロメタルは、抜本的な省貴金属とコストダウンを実現するLSI実装用パラジウム単層被覆の新型銅ボ

ンディングワイヤ「EXI」に関する特許について、田中電子工業(株)に対しライセンス供与する契約を締結した。同業ボンディングワイヤメーカーに対するライセンス供与は今回が初めて。新型銅ワイヤのさらなる市場拡大が期待される。

総務部広報センター
▲03-6867-2135

メセナ

韓国POSCOと音楽交流 スチール&ストリングスコンサート開催

新日鉄と韓国のポスコ社は9月6日、東京・千代田区の紀尾井ホールで「スチール&ストリングスコンサート」を開催した。両社は2008年から両国でクラシックや日韓の伝統音楽など多彩な音楽交流を行ってきた。今回は韓国

の室内楽グループ・アンサンブルDITTOと、日本の俊英ギタリスト・大萩康司という日韓の若い世代を代表する音楽家による演奏で招待客を魅了した。

総務部広報センター
▲03-6867-2135・2146・2147



新日鉄 宗岡社長(左端)、POSCO 鄭会長(右から3番目)と出演者



パラジウム被覆新型銅ボンディングワイヤ EX1
実装例

室蘭ねりこみ



担ぐ若衆の肩越しにや
夢を託した力こぶ
やサエエンヤ
サーノドツコイシヨ



(※) チーム「室蘭ソーラン」の歌詞より

室蘭ねりこみは1992年、末廣六郎所長（当時）の提唱で始まった。20回の節目を迎えた今夏は、企業や商店会など18梯団が参加。室蘭製鉄所と協力会社の若手社員らも神輿を担ぎ、室蘭のメインストリートを勇壮に練り歩いた。沿道に詰めかけた市民は、担ぎ手に拍手と歓声を送り、力水を浴びせる。祭りの熱気が最高潮に達し、まちが一体になる瞬間だ。





育もう、
日本のものづくりの
力あわせて。

新しい日本へ。いまこそ、日本のものづくりの真価が試されようとしています。社会を築き、支えてきた鉄もまた、さらなる力を発揮しなければなりません。新日鉄は、ものづくり企業の原点である「現場力」と「イノベーションの創出力」を徹底的に磨き、社会に喜ばれる最先端の鉄鋼製品を安定的にお届けしていきます。また、鉄鋼技術は追求すればするほど、どんどん新しい世界が拓けるもの。ここでも原点に立ち返り、ナノの世界から鉄の素材としての可能性を追求します。日本の強い未来を育みたい。新日鉄は全力を尽くしていきます。

先進のその先へ、新日鉄
www.nsc.co.jp

文藝春秋 9月号掲載

CONTENTS

研究開発の現場から Series14 挑戦しています。夢のものづくり.....	2
東日本大震災特集 再生に向けて始動！ 釜石製鉄所	3
トークスクエア 人間、働いてさえいれば、なんとかなります 漫画家 西原 理恵子氏	12
GROUP CLIP	16
「新日鉄グループの復興技術・まちづくり支援」をウェブサイトに掲載	
新日鉄ギャラリー 室蘭製鉄所	19

表紙のことは『景色-あそこから むこうは-』2011年 鉄・金屎

あそこまでは
こちらの世界
あそこから むこうは
別の世界

多和 圭三 (たわ・けいぞう)

作者プロフィール／1952年愛媛県大三島生まれ。日本大学芸術学部美術学科卒業。81年に真木画廊で初個展を開催。以来、鉄を叩くことを通じて制作を続ける。全国の画廊や美術館で個展を開催するほか、米国、韓国、バングラデシュでも作品が紹介されている。94年には新日鉄本社にて開催された「第3回 STEEL ART展」に出品。95年タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞受賞。2003年第33回中原二郎賞優秀賞受賞。07年文化庁買上優秀美術作品。09年より多摩美術大学教授、現在に至る。